

☆ 子ども会(学習会)だより ☆

MY SKY 第17号

マイスカイ

1996年9月24日火曜日発行(毎週火曜日定期発行)

発行者

板野中学校

学習会

編・讀:吉誠社

忙しかった週末も終わり、いよいよ2年生の修学旅行、全体学習、板中同研が近づいてきました。それぞれの行事に、同和教育に関わる共通のテーマを見つけてつなげられると、それらが生きてくると思います。よ～く見つめてみましょうね。

ところで、私は最近になって、家から歩いて1分くらいの所にある銭湯に行くようになりました。(といつても週に一回くらいですが)泡風呂、水風呂、ワイン風呂、そして何よりもサウナがあるということが、私を銭湯に誘うのです。日暮れに風呂桶を持って、涼しい秋風の吹く道のりを、ぼんやりと歩いて行き帰りするこの心地よさ。何とも言えない至福のひとときです。

このことをある知人に言いますと、こう切り返されました。「銭湯っていうもんは、たいてい右が男風呂で、左が女風呂になっとん知っとるで?」「へっ?」この後もいろいろ話をしてくれました。「日本人の意識の中に『右は良くて、左は悪い』というニュアンスの言葉が意外に多く、それがいろんな差別意識に利用されている。たとえば、『右舞い=景気がよい』『左舞い=景気が悪い』『左団扇=仕事をしなくても気楽にできる』など…。これらのことと女性差別と結びついて、銭湯でも『右=男、左=女』となっている」というのです。なるほどです。と同時に、「こんな所にまで差別意識が利用されてきたのか!」と、驚きました。気づいてる人は気づいてるんですね。気づいていない私は、まだまだです。みんなでこんなことに気づき、不合理な差別をともにくしていく仲間となれる事を、期待して止みません。みなさん!頑張りましょう!



しん わら じんけんこうざ えがおうつく じんけんらくこか つめ しんじ
①新ちゃんのお笑い人権高座～笑顔美し～人権落語家 露の新治(9月21日:町民センター)

いや～おもしろかったですねえ!!さすがプロの落語家です!何でもプロフェッショナルは、やっぱり違います。笑いのコツを知つとるっていう感じですね。

なかでも私が一番面白かったのは、「ちりめんじやこ」。ほとんどの人がわからんと思い

ますので、ちょっとだけ説明させてもらいます。

差別意識のもつイメージは、一体どこから来るかというと、それは初めてそのことに触れたときの情景が問題なんだそうです。たとえば、小さい子どもの前でお父さんが被差別部落の悪口をお母さんに言っているとします。そこでお母さんが「お父ちゃん、何も子どもの前でほんなこと言わんでもー！」なんて言うと、子どもとすればやはり気になりますがな。それで純粹に「お母ちゃん何のこと？」なんて訊こうものなら、「子どもは知らんええの！シッ！」てえな感じですわ。ほら、子どもとしたら『何や、えらいこわい霧囲気やなあ。こら、絶対しゃべったらあかんのや……』と思いますがな。ほれが、部落に対するイメージになってしまふんですね。

ほれが例えば、お父ちゃんがちりめんじやこの悪口言うてたとすると、どうでっしゃろ。お母ちゃんが「お父ちゃん、何も子どもの前でちりめんじやこのことや言わんでも…おおこわ、口にしただけでもこわいわ！」なんて言おうもんなら、子どもの頭ん中には『ちりめんじやこっちゃあよっぽどこわいんや！』ってなりますがな。こわいでんなあ、イメージっちゅうもんは。

他にもありまっせえ。カミナリ。「カミナリ鳴りよった！早うおへそ隠さなカミナリさんに取られるでえ！」って言ってる、おばあちゃんの顔がこわいんやて。よう知らんとこわがる意識が、差別意識と握手しまんねや。気いつけなあきまへんなあ。

あつ、露の新ちゃん、こんなことも言うてはりましたな。差別につきものなんは、二つあって、一つは今言うてはりました「イメージ」。もう一つは、「湿り気」。

ウンコはウンコでも、渴いてたら靴で転がそう思うたら転がせますけど、出来たてのはやほやで湿った、グニヤッてなるやつは、なんや汚いような気がしますわな。そんなもんですわ。

まあ、なんやかんや言ったかて、「起きて半畳、寝て一畳。天下取っても二合半。かわやに入ればみな同じ。風呂に入ればみな裸！」でっせ。どんな偉い言われてはる人でも、体起こして半畳は出まへん。寝たら一畳ぐらいなもんですわ。たとえ天下取った人間でも、よう食べられて二合半ぐらいや。ましてや、かわや(便所)に入った格好はみんな同じや。風呂に入って水着着てる人なんかおりまへんがな。み~んな同じ。どこ~も変われへん！ホンマに正しいことが、一番強いんや！ただそれだけですわ。

自分の人生、自分が主役！一生一度の人生を、みんなが思うように生きまへんか！！

以上、新ちゃんリポートでした～お・わ・り！

なお今回の落語については、A I テレビが録画していたので、機会があればぜひともご覧になってください。ちなみに私も見たいので、録画された方はご一報を！チャン！チャン！



◇ これからの日程 ◇ ◇ ◇

今週からいよいよ2学期の全体学習がはじまります。1学期や夏休み、そして2学期に入ってから取り組んできたさまざまな行事が、今の学級・学年に生きるかどうか、それが試されるときです。まだまだ1年のちょうど半分で、道のり半ばですが、今のストレートな思いが出し合え、本当の意味での仲間の絆^{きずな}が、今より少しでも確かなものとなるよう、頑張ってみましょう！！ 3Cのみんな、頑張ろうぜ！！

それと余談ですが、この夏板野町に「文化発信局・さくらホール友の会」という自主サークルを、町内の知人^{ちじん}数人^{すうにん}と一緒に^{と一緒に}つくりました。『せっかくさくらホールができるんだから、そこを拠点として、定期的に文化芸術活動を町民手作りで企画運営していくこう！』ということなんです。身近な町内でいろんな文化に触れ、知り、文化的視野を広げることで、心の豊かな町づくりが行えればと思うのです。何といっても、町づくりの基本は、人づくりです。人づくりがしっかりできていれば、町は自然と町民にとって住みやすい環境^{かんきょう}となるはずです。実はその会員を募集しています。会員になるといつても、別に何のメリットがあるというわけではありません。でも、もしあるとするならば『自分の見たいステージの希望が叶うかもしれない……』ということくらいです。文化はいつの時代も若者が創造してきました。会員になり、企画運営に参加してみたい人！待ってます！

ちなみに友の会発足企画第1弾として『吉野川ピアノ紀行河野康弘コンサート』を、企画しています。矢沢永吉バンド元キーボーダー^{やざわえいきち}など^{など}いうこともあって、結構ファンキーなコンサートになるのではないかと思います。でも演奏する曲は、「サウンド・オブ・ミュージック」の他、ディズニー音楽、ピートルズナンバーから童謡まで、幅広い内容となっています。ホンモノに接するという機会の少ない私たちにとって、きっと血肉^{ちにく}となり、素晴らしいひとときが感じられると思います。

音楽、ピアノ、そして自然に興味のある方、このコンサートを機会に、私たちにとっても身近な吉野川のこれからについて、一緒に考えてみませんか？詳しくは次の通りです。

10月12日(土) PM2:00～ さくらホール

前売券(1000円)販売所：吉成、文化の館図書館、稻富写真館、井上書房、他



《MY SKY 第17号》

9月26日(木) 3年第3回全体学習3年C組: 資料「『進路決定—ゆれる心』に取り組んで」

26日(木)~29日(日) 二年生修学旅行(中国・九州地方): 9/30, 10/1午後→二年生代休

10月1日(火) 『MY SKY 第18号』発行日

3日(木) 1年第3回全体学習1年B組

6日(日) 板野養護学校体育祭

8日(火) 『MY SKY 第19号』発行日

9日(水) 第3回板野中学校同和教育研究大会・2年第3回全体学習2年D組

: 資料「学習会による思い」(1996年度板野中学校部落問題意見発表会生徒作文)



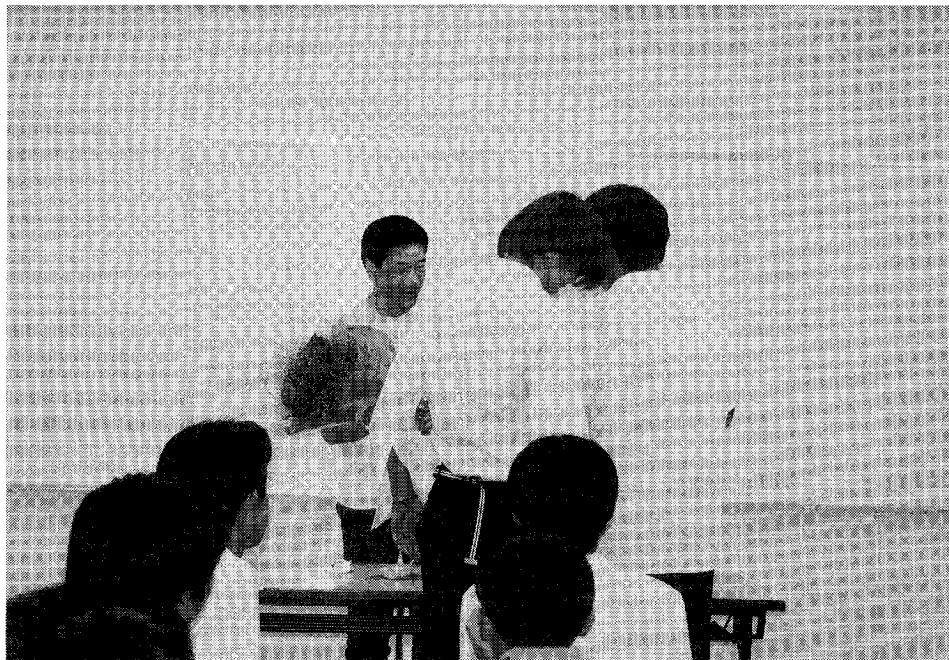
※ 「MY SKY」に関する感想や意見を広く求めています。取り上げてほしいことや
日頃疑問に思っていることなど、何でも結構です。ぜひとも吉成までお便りください!

※ 本誌に掲載している参考文献等についてのお問い合わせは吉成までお願いします。み
なさんもしっかりと原本を読んでみてください。

ねむ!!



え～。今回ちょっと忙しくって、ネタ薄になってしまいそうなので、昔とておいた、
灰谷健次郎さんの記事を載せておきたいと思います。夏休みのことや音野さんのことは、
また詳しくお伝えしたいと思います。すんまへ～ん！！



音野修平さんを囲んで

「天の瞳」で教育を問う

灰谷健次郎さんと聞く

<上>

「兎の眼」「太陽の子」などのベストセラーで、子供から大人まで幅広いファンを持つ作家の灰谷健次郎さんが、久しぶりに長編小説を発表しました。「天の瞳」幼年編I、IIが新潮社刊、各二六〇円。学校の校門からは出します強い個性を持った男の子の成長を追いかながら、現代社会や教育の疾苦をあり出してくる。灰谷さんに、作品のこと、今の教育について聞いた。

「今社会は子供にとって暗くてつらいものじゃないですか。大人の価値観を子供に押し付け、個性を持つて自由に生きることはできなくて、いるから」

子供の背負う不幸は、大人の不幸にも重なる。親も教師

も、だれ一人として今の教育がよいとは思っていない。悪く悪に状況は、なまけ屋根のいじめ屋殺人事件に出でた。それがをしていて、いつかは必ず出する子供がいる。

「こんな社会でも人間が生きていける。今の子供は自分の苦しみ悲しみを、

子どもにはつらいうべき現代

棒にはめ込み生命力奪う



「今は、子供にとても大人にとても、悩みが深い複雑な時代」と語る灰谷健次郎さん(東京都新宿区)

だれにも關してゆきません。教師も親も大半は、しつこい教訓をするだけです。だから、だれでもはじめ、また、いじめられて大きくなつた。ある意味では必要悪とも言えるかも知れない。けれど、いじめられたつらさや悲しみをだれかが聞いてくれれば、まるで氣を取り直して生きしゆけるものなんです。それがないじろに現代の社会や学校の病氣がある」

「今学校で起こっていることをそのまま書いたら、小説にもならへや。例えは、罰として子供に廊下の板をねからせること(あわせること)教師が現実にいる。それを書いても、そんなひどい教師がいるはずさんは憤る。」

がない、リアリティーがないと言わてしまつ。それほどひどい状態なのです。それでも親たちは、いい学校に入り、いい会社に就職するのが幸せと信じて、子供たちを追い立てる。

「大人の意識(じい)に子供をはじめどうじう意識が、今ほど強じことはない気がする。軍国主義時代に船場に駆り立てたのに近いような価値どん希薄になっている。子供たちは生活力はどんどん子供は本来、強い生命力を持つていて、それにそれを表現できないくなっている。自分の声でものが言えなくなっている。自分じさせて、怖いですね」。